

特集
音楽の力

東日本大震災、阪神・淡路大震災 それぞれの復興と音楽教育

東日本大震災から3年が過ぎ、阪神・淡路大震災からは来年で20年になろうとしています。この2つの震災による被害・被災の規模はきわめて大きく、私たちの生活にも広範な影響を及ぼしました。

ヴァンでは、今なお復興活動が続いている両地区について、「音楽の力」をキーワードにまとめました。鎮魂の思い、復興への願いをこめてお届けいたします。

釜石市からのレポート

～松村敦子先生に聞く

当時、釜石市立釜石東中学校で音楽を指導されていた松村敦子先生のお話をご紹介します。

同校では、津波によって4階建て校舎の3階まで水没する被害を受けたにもかかわらず、日頃の防災教育の成果から、登校していた生徒たち全員が無事であったことが報道などでも大きく取り上げられました。

震災のあった年に参加された「かまいしの第九」への取り組みや、本年11月に開催される第62回東北音楽教育研究会などについてもお話ししてくださいました。



○ まつむら・あつこ
釜石市立大平中学校副校長。2011年の東日本大震災時は、釜石市立釜石東中学校の音楽科教諭だった。

◇震災の日から、学校再開まで

震災のあと、子どもたちがどんな顔をして登校してくるのか、とても不安だったことを思い出します。実際、震災翌日の3月12日から4月下旬まで、子どもたちと会うことができませんでした。誰がどこに避難しているのかさえ分からない状況だったので、私たち教師は張り紙をしたり、電話をかけたりして、居場所を確認する作業に追われました。

私が勤務していた釜石東中学校では幸い全員が無事でしたが、校舎が使えなくなってしまったので、釜石中学校を間借りしての学校再開となりました。それが4月下旬です。

市内では、同じように被災した学校が小学校中学校ともに2校ずつあり、教科書を支援していただいたり、教室をお借りしたりして、助け合いながらのスタートとなりました。

釜石東中学校では、授業を5教科から始めました。3年生もあり、当然入試もやってきます。まずは5教科の授業態勢

をしっかりと整えようということで、子どもたちの学習が始まり、5月の連休明けからようやくその他の4教科の授業も再開させることができたのです。私は当時音楽教師でしたので、音楽の授業として子どもたちと関わることはできたのは、5月中頃になってからのことでした。

◇「音楽の授業は、何もなくてもできる」

震災直後、マイナスな面ばかりが目や心に入ってくる状況の中で「音楽の授業では何ができるだろう」と考えることがある一方で、「音楽は、何もなくてもできるのではないか」とも思っていました。どこでも、誰とでも、ピアノや楽器がなくても、歌ならア カペラでも歌える、——生きてさえいれば。声を大にして言うことはありませんでしたが、私の中では、何もなくても子どもたちと音楽をしよう、という気持ちが支えとなりました。何もない状態でも大丈夫だと信じて、新しい年度の音楽の授業を始めました。

◇震災のあと、子どもの歌声は…

「さあ、おいで」

「そのままでもいいんだよ」

「今までに歌った曲を、また歌ってみようか——」

そう呼びかけて、何曲か歌ってみました。

子どもたちの声は震えていました。学校が始まったときは「久しぶりだったね」と、思っていた以上に元気そうに見えた子どもたちでしたが、歌声にはほんとうの姿が表れました。怖い思いをして、気持ちがカチカチにこわばっているままというのが正直な印象です。そうした気持ちを少しでも和ませて楽にしてあげたい、と痛切に感じました。とにかく少しずつ少しずつ声を出しながら、たくさん曲を歌ったと思います。教科書がなかったので、新しい3年生には滝 廉太郎の『花』を印刷して渡しました。固まっていた表情から、ようやく和らいだ表情や笑顔が生まれるようになり、歌声にも変化が表れてくるようになるまでには、少し時間がかかりました。

◇「大丈夫」と声をかけ続けた日々

音楽の指導とは別に、学校としては常に子どもたちの学力や、心のケアといった点についても意識していたと思います。ひと月遅れての授業開始は、それだけでも子どもたちに負担をかけるため、しっかりした指導が必要でしたし、心のケアについては言うまでもありません。親御さんや兄弟姉妹、親戚、家などを亡くした子どもが6割から7割もいたのです。ほとんどの子どもたちが心に痛みを抱えていました。

「大丈夫だよ、大丈夫だよ」という言葉をかけながら、子どもたちを見守っていく毎日が続いたことを覚えています。何もなく、学校に来れば友達がいるし先生たちもいるよ…。日常を取り戻すことを優先的に考え、子どもたちにはそう伝えていく毎日でした。

◇「第九」の練習が励みに

釜石市では市のイベントとして「かまいしの第九」を30年以上続けています。釜石東中学校では、震災が起こる前から2011年には学校として「第九」の演奏に参加しようと決めていました。それも教師も生徒もドイツ語で歌うために「総合」の時間を使って練習するという計画も立てていました。

「おお友よ、このような音ではない！もっと早く、そして喜びにあふれた歌を、歌いだそう！」

「第九」では、自分が求めているものが「いやこれは違う」「これも違う」「ああ、これだ。ついに見つけたぞ」というように、苦難を乗り越えていく姿が描かれています。それが、子どもたちのこれからの人生にまさにぴったりだと、震災後の大変な時期ではありましたが、ぜひとも全校生徒と教師が一丸となって取り組みたいという機運が高まり、予定どおり参加することにしました。

ドイツ語に挑戦するなど、無謀なこととは重々承知していましたが、実際に歌うことを通して苦しいけれど何かをつくり上げていく喜びや音楽のすばらしさを文字どおり「体験」させたかったことも大きな理由としてありました。子どもたちに「この曲を歌いなさい」と言うのではなく、教師もいっしょに全員が参加するのです。パートリーダーを先に育て、担任の先生方も毎週練習に参加してくださいました。一人ではなく、支え合って何かを成し遂げることのすばらしさを、子どもたちも教師もあらためて感じる事ができたと思っています。自分が求める「生きる喜び」とはどのようなものだろうなど、子どもたちなりに感じ取ってくれたらいいと思いますし、ほんとうの喜びというものは、そうそう目の前にはないけれど、苦難を乗り越えることで得られたものを大切に

してほしいと感じた取り組みになりました。

◇『いつかこの海をこえて』

子どもたちの音楽活動については、多くのボランティアの方々が、鑑賞する機会、楽器などの支援、吹奏楽の指導といった面で支えてくださいました。やはり生の演奏などは子どもたちにとって、とても大きな癒しや励みになったようです。『COSMOS』を作詞作曲されたミマスさんは、子どもたちの言葉をもとにして新しい歌をつくってくださいました。そしてその曲を富澤 裕先生が三部合唱に編曲してくださいましたのです！できたてほやほやの『いつかこの海をこえて』を発表するため、釜石まで遠路はるばる足を運んでくださり、それにはほんとうにみんなが感激して大喜びしました。

◇防災教育の大切さと課題

釜石東中学校や^{うのすまい}鶴住居小学校は海の近くですので、防災教育への意識は確かにありました。そして大きな地震があったときは、99%津波が来ると言われていましたので、3月11日の地震直後は、パニックになるというより「来たな」という思いがよぎったことを覚えています。

また、高台にある大平中学校が避難所になり、市の職員の方々が来るまで、大平中の先生方が家にも帰らず、避難所運営の協力にあたったそうです。防災に対する取り組みは地域ごと、学区ごとによって「何をすべきか」が異なると思います。大切なのは地域の実情を把握して、地域の方々・保護者の方々としっかり手を携えて取り組むことだと感じました。

中学校では「助けられる人から助ける人へ」を目標に、消火訓練、応急処置、炊き出し等の学習を進めてきました。ただ、やはり課題もたくさんあるのです。技術としての訓練を積んでいても、実際にそうなったときに、自分から進んでできるかというところまではなかなかいきません。災害が起こったときに、ほんとうに動けるように——班をつくってリーダーを決めたり、誰がどこで何をするのかについて把握したり、



組織的に動いたりできるような防災教育をしていかないと、実践には結びつかないことを思い知りました。たとえ中学生でも、地域住民の一人として防災や避難所でのボランティア活動に関わっていく、ということが大事だと思います。

◇東北音楽教育研究大会にける思い

釜石地区・大槌地区の中学校の現状は、7校中4校が教諭、1校が常勤講師、2校が非常勤講師であり、研究を進める上ではたいへん厳しい状況です。それゆえ、小学校、中学校ともに今回の東北音研は勉強させていただく貴重な機会だと考えています。私たちにできることは、震災から3年がたった今、子どもたちがこのように学んでいるという姿を見ていただくことだけです。歌うことによって、子どもたちの表情はこんなにも明るくなったとか、元気になったということ。「音楽の力」を心から感じるところです。

また、言葉やコミュニケーションについてもポイントになると考えます。特に「自分の思いを伝える」ことは大事にしている点です。ずっと自分の心に蓋をしていた子どもたちも、時間をかけて少しずつ「苦しい」「つらい」と言えるようになりました。次は音楽を通して「こういう理由で、私はこの曲が好きになりました」と自分の思いを相手に伝えることを目指します。もちろん、音楽の要素を生かすことも大切です。

今までは子どもたちの学習内容と発言との間に食い違いがあるように感じたことがありました。例えばビッチが合って

いなくても、子どもたちは平気で「きれいにハモって歌ってました」と発言することがあるのです。こうしたことから、音楽の基礎的な部分である、きれいな音を感じたり、表現したりといった学習がきちんとできていなかったという課題が見えてきました。〔共通事項〕をただ単に覚えて発言の中で使うのではなく、音楽の活動を通して自分で理解し相手に伝えるという、質の部分を高めていけたらと思っています。

「心を開く」「自分から思いを伝える」といったコミュニケーション能力はとても大切です。震災を経験し、音楽と関連させながらさまざまな思いを伝えられる子どもたちを育てることができれば、という願いもあります。そうした点で、言葉は大事な要素になりますし、今回の研究大会で深めていきたいポイントでも考えています。

Information

11月14日(金)

第62回 東北音楽教育研究大会

第56回 岩手県音楽教育研究大会 釜石・大槌大会

大会主題 「～心に音楽のよこびを～」

〔会場〕岩手県 釜石市立甲子小学校、甲子中学校

〔問い合わせ先〕

大会事務局 釜石市立甲子小学校 副校長 千葉愛子

〒026-0055 岩手県釜石市甲子町第9地割87

TEL 0193-23-5525 / FAX 0193-23-5520



大平中学校に向かう途中、釜石市立甲子小学校にも立ち寄らせていただきました。左は、4年生が『ファランドール』を鑑賞している授業風景です。

釜石市立甲子小学校、校長の山本 繁先生。





阪神・淡路大震災から19年目

平成7年に起こった阪神・淡路大震災から、まる19年が経過しました。来年は、20年という大きな節目を迎えます。平成25年度 全日本音楽教育研究会兵庫大会の2日目に、全体会の閉会行事で、『しあわせ運べるように』* が全体合唱として歌われたことは記憶に新しいのではないのでしょうか。

毎年、震災の起こった1月17日には近畿各地で追悼行事が行われ、そこで歌が歌われることもあります。なぜ、人の死を悼み、悲しい出来事に思いを寄せるとき、私たちは歌を歌うのでしょうか？

キリスト教では、死者のためのミサ、またはそのミサの式文を歌うミサ曲を「レクイエム」と呼びます。死者の魂が天国に迎え入れられるよう神に祈るものです。日本では「鎮魂歌」と訳されますが、「鎮魂」とは死者の魂を鎮めることを指すため、これはあまり正しい訳とは言えません。ただ「レクイエム」の意味するところも、特に第二次世界大戦以降は変化しており、キリスト教を超えて、「人間の死」を表現する音楽になってきているといわれます。日本の作品にもそれは当てはまり、例えば武満 徹の『弦楽のためのレクイエム』、林光の『原爆小景』、三善 晃の『レクイエム』などは、宗教を超越した、人と死をめぐる音楽として存在しています。死者のための「レクイエム」というタイトルがあろうとなかろうと、キリスト教徒であろうとなかろうと、亡くなった人を思い、人間の死に思いをめぐらせて音楽を奏で歌うのは、同じことなのではないのでしょうか。なぜならその音楽には願いや祈りが込められているはずだからです。

現在1月17日には、防災教育の機会として、多くの学校や幼稚園などで避難訓練が行われています。また神戸市にある阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」には、近畿地方からだけでなく、修学旅行などで他の地域から訪れる小・中学生等も多く、全体の来館者数の46.8%を占めています(平成24年度)。海外からも毎年、一定数の利用者が訪れています。

『しあわせ運べるように』を歌い継ぐ以外にも、東日本大震災の被災者と連携して、コンサートやダンスパフォーマンスなど、神戸と東北をアートの結び付ける試みも行われており、人と人の心がつながっています。

その一方で、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた西宮市や芦屋市では、平成25年の時点で震災以前から住所をまったく移動させていない住民の割合が、全人口の2割にとどまるという調査結果も出ています。また、前記のような企画の他にも、教職員による追悼コンサートなどの地道な活動があるものの、1月17日前後に催される追悼行事は、最も多かった震災後15年(平成22年)に比べて4割近く減り、震災のあった日に鐘をつく寺院や教会、黙祷を呼びかける商店街等も減少傾向にあるといえます。

住民の移動や高齢化による世代交代などのため、震災の記憶は時とともに薄れてしまうのかもしれませんが。しかし完全に震災の記憶がなくなることはないでしょう。静かに故人を思い黙祷を捧げたあとに、居合わせた人と声を合わせて歌う。音楽が被災地の人々の心の復興に、優しく寄り添っていくことを願ってやみません。

(ヴァン編集部)

*『しあわせ運べるように』は、阪神・淡路大震災で被災した神戸市内の教員、白井 真先生の作詞作曲による合唱曲。多くの被災地で歌われている。

Spring Seminar

2014 レポート

ヴァン編集部

春の暖かな日差しのもと、今年も津田ホールにて教育芸術社主催の「スプリングセミナー2014」が開催されました。

この会では新作合唱曲による公開講座として、同声・女声・混声の作品各2曲、それぞれ個性の異なる6曲が初演されます。各曲の講習時間は30分。新曲の演奏後、作曲者による「3つのポイント」をベースに実演などを交えながら、演奏者と作曲者、司会者によってステージが進行します。

司会は昨年に引き続き、合唱指揮者の藤原規生先生。作曲者や演奏者とのやりとりの中から、実践的な指導方法や、さまざまな「思い」を引き出してくださいました。



○ 藤原規生先生

○ 八千代少年少女合唱団



～6つの新しい作品が 初演されました。

第1部：同声合唱

ボトリオフォルバック

作詞：山本和子 作曲：横山裕美子

まいごのひかり 同声合唱とピアノのための「のはらうた」より

作詞：工藤直子 作曲：三宅悠太

指揮：長岡利香子 合唱：八千代少年少女合唱団

ピアノ：鈴木綾子

勢いよく始まった『ボトリオフォルバック』。選挙演説にたとえた「繰り返し」の変化のつけ方、イメージすれば音が変わること、各場面の最初の音から変化させることの難しさや大切さについて、合唱団の巧みな実演で曲を追いながら、一つ一つ確認していきました。また、横山先生が書かれる「*espressivo*」の意味など、作曲者本人でなければ分からない、発想記号に込められたニュアンスまで教えていただきました。

続く『まいごのひかり』では、一転して詩の主人公「かぜみつる」くんの、言葉にならない優しさを音にした世界が展開されました。かぜみつるくんが大好きだという三宅先生。詩の世界の上に楽譜の強弱記号があること、かぜみつるくんの気持ちと歌手の気持ちがシンクロするように曲が書かれていることなどが、藤原先生と三宅先生のお話や、合唱指揮の長岡先生と合唱団による気持ちの込め方を歌い分ける実演を通して、語られました。



○ 横山裕美子先生



○ 三宅悠太先生



○ 長岡利香子先生



○ 鈴木綾子先生

大田桜子 私はなぜ？

1. テンポの変化
2. 各パートのバランス
3. 構成を考える



○ LSOTシニア・コア

第2部：女声合唱

うっすらと秋に酔うたここち —八木重吉の詩による三つの歌—

作詞：八木重吉 作曲：長谷部匡俊

私はなぜ？（アカペラ）

作詞：みなづき みのり 作曲：大田桜子

指揮：長谷川冴子 合唱：LSOTシニア・コア

ピアノ：河野紘子

女声合唱の1曲目は、『うっすらと秋に酔うたここち』。八木重吉の「うっすらと」「ぐったり」などの言葉の語感や、詩の世界の表現に幅をもたせることができるよう、シンプルな音で作曲した、という長谷部先生のお話と、それを受けた合唱指揮の長谷川先生による「だからこそ発声法など、たくわえておかねばならない技術が問われます」という豊富な経験に裏打ちされたお話に、うなずかれた方も多かったのではないのでしょうか。

続くアカペラ作品の『私はなぜ？』では、どうすればより深く感情を音で表わすことができるのか、歌詞の読み方、パートのバランスをどのようにとればよいのか等、合唱団の素晴らしい実演とあいまって、とても実践的なお話をうかがうことができました。また、「初めて聴いても伝わる曲」を心がけたという大田先生のお言葉どおり、歌詞がとてもクリアに心に入ってきました。



○ 長谷川冴子先生



○ 大田桜子先生



○ 長谷部匡俊先生



○ 河野紘子先生

第3部：混声合唱

海の石 混声合唱とピアノのために

作詞：大越 桂 作曲：佐井孝彰

若葉の想い (アカペラ)

作詞：佐藤賢太郎 作曲：佐藤賢太郎

指揮：福永一博 合唱：harmonia ensemble

ピアノ：河野紘子

『海の石』は、「どんな人でも希望をもって生きていける」という力強さが込められた歌詞に惹かれて作曲されたとのこと。その詩の世界がまさに「合唱とピアノ」によって展開され、微妙な色彩感の変化とそのイメージについて、藤原先生と佐井先生のおうんの呼吸でのトークに、作曲者自身の思いをより深く知ることができました。

新曲初演の最後を飾ったのは、「勇気」をテーマに書かれたアカペラ作品の『若葉の想い』。母音や子音の発音、四声での音のつくり方といったことに加え、指揮をする先生方にしかできない「間」をつくることについてなど、ほんとうに盛りだくさんの内容でした。佐藤先生がその場で合唱団を指揮すると、音楽が如実に変化したのが新鮮な驚きでした。



○ 佐井孝彰先生



○ 佐藤賢太郎先生



○ harmonia ensemble

すべての新曲初演終了後には、会場全体で『花』を合唱。その後のNコン課題曲ワンポイントレクチャーでは、ステージ(小学校の部)、ロビー(中学校の部)、リハーサル室(高等学校の部)に分かれ、講師の長谷川冴子先生、佐藤賢太郎先生、藤原規生先生のご指導で、講習が行われました。



小学校の部(長谷川冴子先生)



中学校の部(佐藤賢太郎先生)



高等学校の部(藤原規生先生)

※スプリングセミナー2015は、2015年3月30日(月)に津田ホールにて開催の予定です。

音楽でつながる子どもと学び

新しい『小学生の音楽』のご紹介

平成27年度より教科書の内容が変わります。

教育芸術社では、「やさしく、分かりやすく」という考え方を大切にしながら、社会全体から学校教育に期待される課題を教科書に反映させました。

音楽でつながる子どもと学び——。

ヴァンでは「改訂の3つの柱」を中心に、ユニバーサルデザインの理念に則って編集された新しい教科書をご紹介します。



❖ 改訂の3つの柱

1. 学びがつながり、深まる
2. 主体性や創造性を育む
3. 我が国の文化を大切にする心を育む

❖ 〔共通事項〕を生かした学習への配慮

- ❖ ユニバーサルデザインの理念に基づいた教科書づくり
- ❖ 音楽プリズム～「メッセージを送る不思議な木」とは？

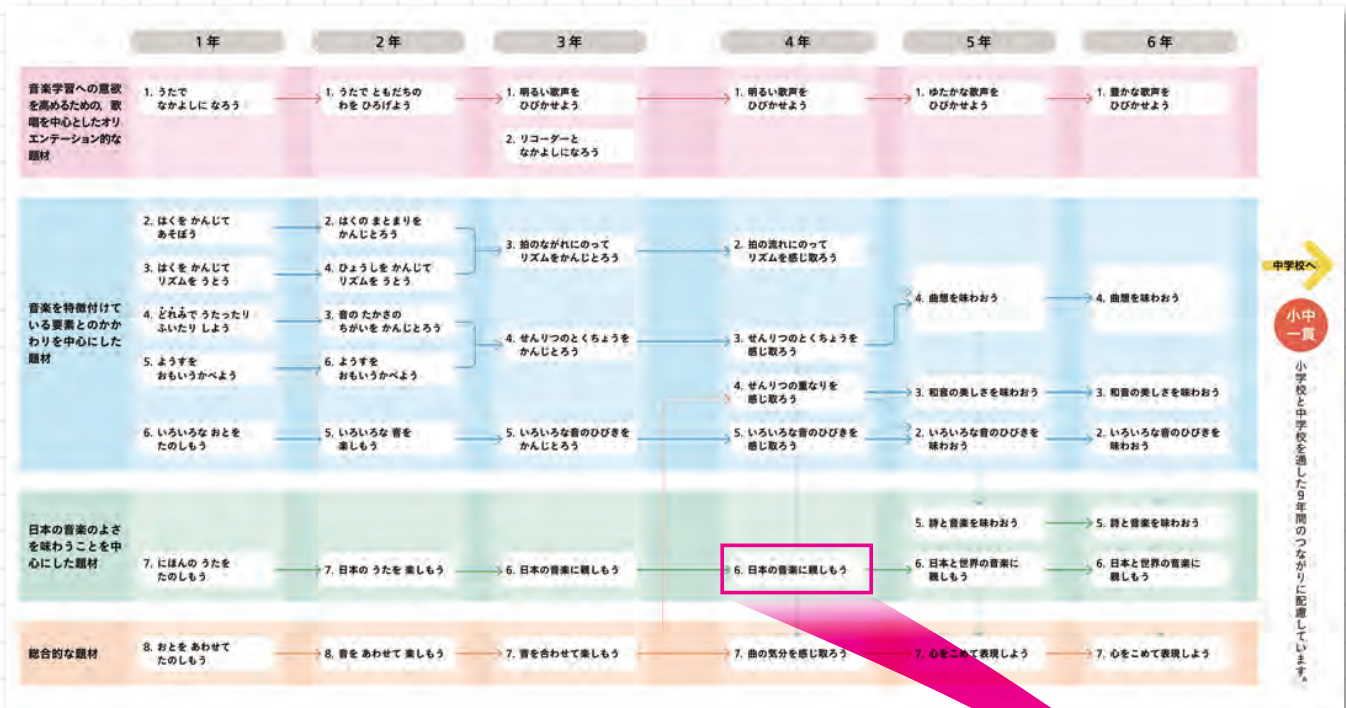


改訂の3つの柱

1. 学びがつながり、深まる

○系統的な題材の構成

- ・ 6年間を通して段階的、系統的に学びを積み重ねていけるように、新しい教科書では題材の構成をリニューアルしました。



6年間の題材の系統一覧

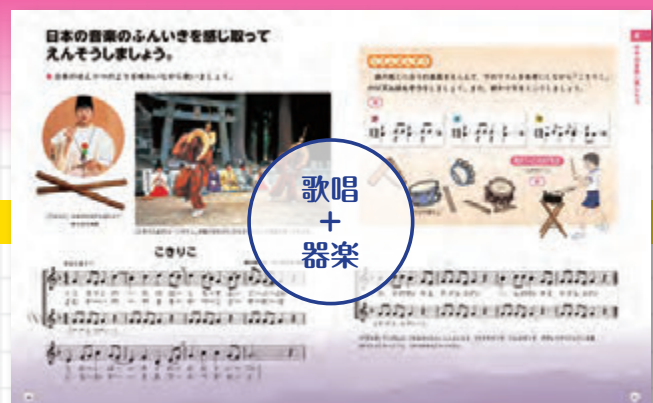
○題材のねらいに迫るための教材群

- ・ 題材内の教材は、すべて題材のねらいと密着した学習目標に添って配置されています。

例：4年「日本の音楽に親しもう」



4年 p.44・45



4年 p.46・47

- ・学習内容は、発達段階を踏まえながら系統的に学びを高められるように配慮されています。
下の一覧は、「音楽づくり」を例にした系統性です。



6年間の「音楽づくり」の系統一覧

5つの音で、おはしのせんりつをつくりましょう。

楽譜 **ミソラドレの音でせんりつづくり**

● 音階で5つの音のせんりつをつくりましょう。

① 下の音階カードを使って、音階で5つの音のりつをみつけてみましょう。

音階カード

② 音階カードの音の並びを

③ つくってリズムをきいてみましょう。

リズム

④ えんぴつでリズムをきいてみましょう。

⑤ つくってリズムをきいてみましょう。

楽譜 **ミソラドレの音でせんりつづくり**

● 音階で5つの音のせんりつをつくりましょう。

① 下の音階カードを使って、音階で5つの音のりつをみつけてみましょう。

音階カード

② 音階カードの音の並びを

③ つくってリズムをきいてみましょう。

リズム

④ えんぴつでリズムをきいてみましょう。

音楽づくり

⑤ つくってリズムをきいてみましょう。

楽譜 **ミソラドレの音でせんりつづくり**

● 音階で5つの音のせんりつをつくりましょう。

① 下の音階カードを使って、音階で5つの音のりつをみつけてみましょう。

音階カード

② 音階カードの音の並びを

③ つくってリズムをきいてみましょう。

リズム

④ えんぴつでリズムをきいてみましょう。

⑤ つくってリズムをきいてみましょう。

楽譜 **ミソラドレの音でせんりつづくり**

● 音階で5つの音のせんりつをつくりましょう。

① 下の音階カードを使って、音階で5つの音のりつをみつけてみましょう。

音階カード

② 音階カードの音の並びを

③ つくってリズムをきいてみましょう。

リズム

④ えんぴつでリズムをきいてみましょう。

⑤ つくってリズムをきいてみましょう。

楽譜 **ミソラドレの音でせんりつづくり**

● 音階で5つの音のせんりつをつくりましょう。

① 下の音階カードを使って、音階で5つの音のりつをみつけてみましょう。

音階カード

② 音階カードの音の並びを

③ つくってリズムをきいてみましょう。

リズム

④ えんぴつでリズムをきいてみましょう。

4年 p.48・49

[illegible]

4年 p.50・51

❖ 改訂の3つの柱

2. 主体性や創造性を育む

○「教材＝音楽」こそ、学習の出発点

- ・子どもたちの発達段階に合わせて難易度を設定した、魅力的な教材がそろっています。
- ・道徳との関連を図りやすく、子どもたちの生活や心情に寄り添った作品を多数取り上げました。



6年 p.56・57

『あすという日が』

東日本大震災の復興を願う曲として、
中学生とも合同で歌うことができます。



5年 p.8・9

『すてきな一歩』

友達との心の触れ合いの大切さを
感じ取ることができる新曲です。



4年 p.8・9

『いいことありそう』

鍵盤ハーモニカのオブリガートが付いた新曲です。



○「音楽づくり」の学習活動の充実

- ・「音楽づくり」の学習を通して子どもの創造性を培うとともに、グループ活動によって、主体的に「協同」しながら学習を進めることができるよう配慮しました。



2年 p.18・19

自分の声を使って様子を表します。



4年 p.40・41

打楽器の「音色」の組み合わせを生かして音楽をつくります。

❖ 改訂の3つの柱

3. 我が国の文化を大切にする心を育む

○全学年を通して設定した「日本の音楽」に関する題材

・各学年で「わらべうた」や「お囃子」「民謡」などに親しみ、その特徴を感じ取る学習を提示しています。



1年 p.52・53



3年 p.46・47



4年 p.44・45



5年 p.40・41



4年 表4



6年 表4

各学年の表4では、全国各地で子どもたちが関わる郷土芸能を写真で紹介しています。

○「こころのうた」(共通教材)の扱い(全学年)

- ・曲に関連するコラムの内容を充実させ、子どもたちに分かりやすく伝えます。
また、題材と関わらせて扱うこともできます。



5年 p.10・11

○「歌いつごう 日本の歌」(全学年)

- ・各学年の巻末には、子どもたちが将来にわたって歌い続けることを願って、童謡や唱歌を数多く掲載しています。



1年 p.64・65

❖〔共通事項〕を生かした学習への配慮

○〔共通事項〕

- ・各教材において、学習内容とどのように結び付けていくとよいのかが分かるように、題材、学習目標、活動文などに〔共通事項〕を繰り返し示しています。

〔共通事項〕

リズム
拍の流れ

曲のかんじを生かしてえんそうしましょう。

それぞれのパート、リズムのちがいをかんじとりながら、拍のながれにのってえんそうしましょう。

ゆかいな木きん

♪100-100

1こざるが こざるが きつてはいて
2こぶたも こぶたも せせうでまねて

まるきの まるきの はしわたリ
いーぽんぽん いーぽんぽん

のこるも、
まねて(木きん)でえんそうして、
せんりつをふんだんしても
楽しいよ。

3年 p.24

**くりかえしや変化を使って、
まとまりのあるリズムをつくりましょう。**

手拍子でリズム

下のリズムを手拍子で打ちましょう。

【もとのリズム】

タン タン タン(ウツ) タン タン(ウツ) タン タン タン タン(ウツ)

上のリズムは、下のようなくんでできています。
手拍子で打ってたしかめましょう。

小さいまとまり 小さいまとまり 大きいまとまり

同じリズムをくりかえしているね。

3拍目までリズムが変わっているね。

3年 p.26

〔共通事項〕

反復
変化
リズム

○「ふり返りのページ」

- ・各学年で押さえておきたい重要な学習内容を、巻末の「ふり返りのページ」にまとめました。

ふりかえりのページ

この冊子を見て学べる大切なことがまとめられています。

1. 音楽の基礎知識

2. 音楽の楽しみ方

3. 音楽の表現力

4. 音楽の創造力

3年 p.72・73

ふり返りのページ

この冊子を見て学べる大切なことがまとめられています。

1. 音楽の基礎知識

2. 音楽の楽しみ方

3. 音楽の表現力

4. 音楽の創造力

4年 p.72・73

❖ ユニバーサルデザインの理念に基づいた教科書づくり

○紙面のデザイン

- ・重要な学習内容が、優先的に目に飛び込んでくるようなシンプルなデザインを採用しています。
- ・色覚特性の違いが、学習内容を理解する過程に影響を与えないよう、繊細な工夫を施しています。



1年 p.20・21

POLAR BEAR LETKISS
Music by Ken Wall
© Copyright 1965 by SWEDEN MUSIC AB, Sweden
Rights for Japan assigned to SEVEN SEAS MUSIC CO., LTD.

○教材のデザインへの配慮

- ・すべての子どもたちが学習内容に迫ることができるよう、発達段階に合わせて技術的な難易度を設定しました。



EDELWEISS
Lyrics by Oscar Hammerstein II Music by Richard Rodgers
Copyright © 1959 by Richard Rodgers and Oscar Hammerstein II
Copyright Renewed
WILLIAMSON MUSIC owner of publication and allied rights
throughout the world
International Copyright Secured All Rights Reserved



例：5年 p.62・63
『クラッピング ファンタジー 第4番』
歌や楽器を使わなくても参加できる合奏教材です。

例：3年 p.52・53
『エーデルワイス』
発表会にも使える易しい合奏教材です。



例：6年 p.44
『きつと届ける』
言葉の自然な抑揚やアクセントを生かした新曲です。

❖ 音楽プリズム～「メッセージを送る不思議な木」とは？

3～6年の巻頭には、音楽への興味・関心を高めることを目指した特集ページを設けています。
音や音楽を聴くこと、表現すること——授業での学習をより深め、広げるためにこれらを活用することができます。

5年では「音の力」をテーマに、“メッセージを送る不思議な木”と題してペルーのボラ族が使用しているマングワレを紹介しています。遠く離れた人にメッセージを伝える「音」をきっかけに、子どもたちは「音の力」をどのように感じ取るのでしょうか。
現地取材された月尾嘉男先生にお話をうかがいました。



5年 p.2・3

一つの音から始まる世界

月尾嘉男 聞き手：石上則子

石上：マングワレの音を実際にお聞きになられて、いかがでしたか？

月尾：特定の人を指名できることに、まず驚きました。集落に「これから祭りだぞ」と伝えるぐらいなら、日本の太鼓でもできそうですが、特定の人に特定のメッセージを送ることができるのは、すごいことだと思います。

石上：2つの木は、それぞれ音の高さが違うのですね。

月尾：太いほうは女性、細いほうは男性を表し、太い木のほうが高音を出します。両方を組み合わせて、音の高さやリズムで表現したい内容を伝えるようです。

石上：音はどれくらいの大きさなのですか？

月尾：低音がかなり響く感じでしたが、音はそれほど

大きくありません。ポコポコポコと、ティンパニぐらいの大きさで鳴ります。現地はゴムの木が多く、生ゴムを巻いたばかりでたたきます。

＊

石上：かなり遠くまで音が届くそうですね。

月尾：族長に「音はどれくらい届くの？」と聞くと、「隣りの家」と言うのですが、隣りの家とは、何十キロメートルも先なんです。最高で、日本でいえば、東京から横浜ぐらいまでの距離は届くそうです。私が訪ねたときに、「自分のおじを呼んでみよう」と族長がマングワレをたたいてくれたところ、しばらくすると「お客さんか」とおじさんが現れました。



○ 月尾嘉男(つきお・よしお)
1942年生まれ。愛知県名古屋出身。工学博士。
名古屋大学教授、東京大学教授などを経て、東京大学名誉教授。
専門領域は多岐にわたる。

石上: ボラ族の人たちは、どのようにしてマングワレの音を理解しているのでしょうか？

月尾: 子どものときから教育しているそうですが、最近子どもたちが熱心に覚えられないので、通じにくくなったと族長は嘆いていました。



石上: とても静かな環境だから、音もよく聞こえるのでしょうか？

月尾: ジングルですから動物の鳴き声は聞こえますが、全体に静かです。ただし最近では、数キロメートル先のアマゾン川の本流をエンジン付きの船が頻繁に通るため、「船が増えてマングワレの音が聞きとりにくい」と言っていました。私たちには、数キロメートル先の音など聞こえませんが、彼らにはよく聞こえているのです。

石上: 「聞く」という能力そのものが違うのですね。月尾先生はもともと、先住民族の取材を通じて、新しい社会へのヒントを得ることも目的だったとうかがっています。

月尾: 携帯電話は通じなくなる場合もありますが、こんなに原始的なマングワレが携帯電話に匹敵する内容を伝えることができるのは驚くべきことです。私たちは文明の成果に囲まれた社会で生活していますが、そうではない世界もあることを知る大切ではないかと思います。



石上: マングワレはコミュニケーションのツールではありますが、音が生まれる静けさがあるからこそ遠くへも届くし、伝わっていく。そのように音楽の授業で

も、静かなところから音が生まれ、その音を大事にしたいと思っています。先生のお話をうかがって、音が生まれる条件を子どもたちの中に整えていくことが必要だと感じました。そうすれば、子どもたちが音楽を聴いたり演奏したりするときにも、音を大事にするようになると思います。ぜひ「音」という原点を大事にしたいものです。

月尾: 個人的には、ヴァイオリンのように、自分で音をつくる楽器はすばらしいと思っています。

石上: 子どもたちにも、自分で考えて自分の音楽をつくれるように育ててほしいと感じています。

月尾: そうですね。



○ 石上則子(いしがみ・のりこ)
2013年、板橋区立徳丸小学校を主任教諭にて退職。現在、日本女子大学、東京家政大学、東京学芸大学にて非常勤講師。日本オルフ研究会会員。

石上: 先生がお感じになる音や音楽の力とは、どのようなのでしょうか？

月尾: ログスとパトス、すなわち論理的なものと情緒的なものの統合だと考えています。音楽をつくるためにはログスが重要ですが、演奏される結果はパトス、精神に訴えるものです。人間は論理だけで生きているわけではありません。感情というものも大事だと思います。小説も絵画も感情に訴える力をもってはいますが、もっとも感情を動かす力があるのは音ではないでしょうか。そこに音楽の価値と魅力があると思っています。



風の音

エッセイ

前田美子

Maeda
Yoshiko

子どもの階段

さっきから何やらブツブツ歌っていたトコが私の側にペタッと、いつものようにくっついてきた。

「“オトナの階段のぼる”って知ってる？」

「あら、コマーシャルでしょう」

「大人がオトナの階段のぼったら、どこに行くの？」

「トコが、階段のぼると、どうなるのかな」

「今、2年生だから、いっぱいのおぼらないと大変かも。中学校とかさー。でもママなんか、おばさんになるんだよ。次はおばあさんだって、いやだな。先生は？」

来た来た、トコの話は必ずつつ込んで返してくる。

「“オトナの階段おりる”ってないの？」

「あー、あるかもね！」

「私は階段はのぼらないよ。おりる専門がいいな、だめ？」

「ん、ふーんそれがいいか……」

トコは、スポーツ系以外は何でもできるらしい。習い事もたっぷりの忙しい2年生。

私が指導をするときに

「この曲は何拍子かな？」

と聞くと、みんな手拍子や、手遊び、指揮など、それらしく動いている。

「3拍子って書いてあるよ」

「3拍子って、どうしたらいいのかな。身体を使ってみて!! 手だけでなく動いてみて!! 例えば、違う曲ではどんなのがある？」

“うみ” “かっこう” “ワルツ” “ぞうさん” “山のあさ”

次々に歌いながら3拍子ごっこが広がる。

その中に“春が来た” “おつかいありさん” “こぎつね”も交じってくる。「ちょっと難しくなったね。グループを作って、前でも横でも円でもいいから動いてみて。拍子が変わったら反対に進もうか」

「先生、3拍子は前に歩きにくいよ」

「そうしたら、横にぐるりっと回転でもしてみて。そこは工夫でしょう」

“おつかいありさん” → “ぞうさん” → “かえるのがっしょう”

するとトコが、

「“ぞうさん”は、ブラリの鼻らしく、ゾ～さんってゆらすと楽しいよ。“ありさん”はちょこちょこ可愛くしたい」

すてきなアイディアを出してくるのがトコ。ちょっと自慢気だ。

5月。私たちの合唱団は「東京コンサート」という合唱の祭典のような音楽会へ出演するために出かけた。

まえだ・よしこ

長崎県出身。東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、授業や課外活動を通じ、一貫して子どもと真っ直ぐに向き合い、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。

元東京女子体育大学／短期大学講師。むさしのジュニア合唱団「風」指揮者。全日本合唱教育研究会理事。

著書に『子どもと歩く』『レパートリーを広げる小学生の合唱(CD付楽譜集)』(音楽之友社)、『卒業式のうた1』『卒業式のうた2』(共編：教育芸術社)などがある。

その電車の中で、トコと1年生のユー君は、かなりのハイテンションでじゃれ合っていた。周りも初出場の2人が嬉しいのだろうと笑って我慢して見ていたが「シーッ!!」ぐらいでは止まらない。ついに皆が2人を引き離しにかかったが、ホールに着いてもゲラゲラ笑って2匹の小犬になってじゃれ合っている。「2人は何をしに来たの?ホールの中に、あなたたちのように騒いでいる人はいないでしょう?舞台に出ないでこの部屋で待ってなさい。電車の中で周りに迷惑をかけた人が、「音楽を聴いてください」って歌えるはずがないでしょう」

さすがに2人はシュンとした。

この日は、組曲“遠野地方の伝承歌”(吉川和夫作曲)を歌うことになっていて、終曲の“踊り唄”では、手拍子、足拍子、おかぐら鈴、スラップスティック(2枚の板を打ち合わせる楽器)に合わせながら μ へ向かう。ここで子どもたちは次第に中央に集まって円陣を組み、最後はトコとユー君を肩車するという演出になっていた。

だから2人は、何としても出なかったのだろう。

トコは泣きながら「ユー君とトコがいないとクライマックスが盛り上がらないからがんばってって先生が言ったから、どうしても出たい」

「いいえ。トコの役をやりたい人は他にもいます!!」

「もう二度と迷惑をかけないから……」

と言って、2人は皆に謝った。

本番前、トコのことを気にする間もなく出番が近づき、お母さん方にトコをお願いして舞台へ行った。ところが、いつの間にトコが皆に交じって

入ったのかニコニコして歌い、ユー君もしっかりとこっちを見て歌っている。

そして終曲。手拍子、足拍子、力強い声、スラップスティック、おかぐら鈴とともに集まった全員の円陣の中に、両手を上に広げて嬉しそうな肩車のトコとユー君。

次の日、トコママが顔色を変えてとんで来た。

てっきり昨日の騒ぎの話かな、と思って聞くと

「私、クライマックスが大クライマックスになってすてきになるために、鈴を鳴らしたの」

と、トコが言っていたという――。

トコは、クライマックスの部分が大好きで、家でもその肩車のシーンの練習をしていたそう。叱られて

出場停止になっていたことは、もちろん両親には言っていなかった。

トコは鈴をポケットに入れて持ち込んだとママに自慢!!あのときの真剣な「ごめんなさい」は、この熊よけの鈴のためだったのか……。

後で聴いた録音には、おかぐら鈴のシャリーンに、少しずれたガランガランが立派に響いていた。

……やられた!!

このとき使った“おかぐら鈴”は、音にこだわって、あっちこっちに行行って聴いて求めたお気に入りの“おかぐら鈴”だったのに。

音楽と真剣に向き合い、階段をのぼる子どもの心に、私もまっすぐに向き合いたい。この件について、トコを叱る機会は逃してしまったけれど。

